まあ、サムったら。

国後旺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
まあ、サムったら。

【Ｎコード】
Ｎ７８６５Ｇ

【作者名】
国後旺

【あらすじ】
発泡酒とか宝くじとか変態とか、そんなことで空気な笑いは生まれる。明日も仕事だ。過去も今も愛だ。

私が今までに付き合った人たちは皆、まるで駄目な男ばかりだった。休みは家でロクにご飯も食べずにゲームしかしない怠惰な男や、偉人の警句ばかりを述べて夢を語るが行動には移さない男や、チェンバル語しか話さない男や、とにかくまるで駄目な男ばかりだった。だけど、そこが良かったのだ。私はどこかに欠点があるからこそ、人は本当の意味で生きられるのだと思っている。欠点があるからこそ、誰かを必要とするのだから。可愛いものじゃないか。欠点の無い人間では、完成された美しさを持った観葉植物みたいに、手の出しようが無くて、寂しくなってしまう。

という感じのことを力を入れた言葉で友達に話したところ、ハイハイハイハイハイハイハイハイと聞き流された。皆、発泡酒を美味しそうに飲みながら。

「ちゃんと聞いているの？」私が不満を全面的に出した言葉をかけるとリエは「聞いちょる聞いちょる」と手を振り、ミクは「『ちょっと駄目なところに萌えるのよ。きゃぴ』て言ったとこからまだ見ぬ全文が分かったよ。何回同じことを言うつもりなの」と溜め息混じりに言った。その横でサムがハイハイ（赤ちゃんがする、アレ）をしていた。きゃぴの所だけ首を右に傾けて人差し指で右頬を突きながら妙に可愛げに言ったミクだが、そんな台詞は言った覚えが無いし私はそんなことをするキャラではない。

「あっ。そうなの？　萌えるとかいう言葉を使ってるんだから、そんなキャラだと思ってたわ」ミクのその言葉に反応して、ハイハイをしていたサムが仰向けになってゴキジェットをかけたばかりのゴキブリのようになった。

「失礼な」と言ったあと、私は残りの数滴を飲み干した。リエが「やけ酒ばいね。うえっへっへっへっ」と苦しげに笑う。午後十一時。家賃十万のアパート、私の部屋にての話だ。

ミクは小さなテーブルに大きな宝くじを置いた。「そういうのは当たらないと思う」
壁に寄りかかって一人、タバコを吸うサラもそう言っていた。

※

乱暴にスーツを着る。窮屈なそれを着ると、余計に頭痛が増す。
「酒、飲み過ぎたー」一人呟くと、虚しさも増した。
適当にコーンフレークを食べ、適当に化粧を塗ると、ノリは悪かった。ゾンビのような猫背で部屋を出ようとすると、うおー！　という叫びに驚き、ドアの前で立ち止まった。なんなんだ？　と、ベッドでまだ眠っているミクに近付くと「リョウちゃん、行かないでー」と布団を抱きしめながら大きな目を潰してうなだれていて、ちょっと笑えた。リョウちゃんとは、ミクが昔付き合っていた人のことだ。少し疲れがとれた気がした。そのあと、横でサムが目を開けたまま寝ているのを見て、どっと疲れた。そのあと、ミクが「リョウちゃん、大好きー」と布団を抱きしめながら「にへら」と笑い頬を上げているのを見て、結構疲れがとれた。そのあと、サムの横のリエが「リョウたそ～、愛しとうよー」と言って、不穏なモノを感じ取った。おぉ怖い。なんであなたがそんなことを言うの、リエ。
午前六時。玄関ドアを開いて見えた空では、もう、太陽は半分くらい顔を見せていた。私の隣に並び立つサラがタバコの煙を空に放っていた。
「行こう」そう言ったサラは、四つん這いだ。頷いた私はその背中に乗る。サラはアパートの二階から飛び降りて、着地。四本足は力強く地面を蹴る。爽快な風が顔にまとわりついた。

※

午前８時に仕事場の朝礼が始まった。上司が連絡事項を述べたの

ち、新入社員の入荷が伝えられた。男。顔が良い男だった。おお、と小さく感嘆な声を発する私の脇腹を仲の良い同僚が小突き、私は阿呆みたいに開けた口を閉じた。それをサラが指でこじ開けた。ふぅ。ぅんを。開いた口が塞がらない。

新入社員の黒民みひろは、深紅の混じった黒髪は長く、大きめの瞳はキラキラと若さ独特の輝きを魅せ、黒縁のセンスの良いメガネをかけた二十二歳だった。

「……よろしく」

「キミ、敬語」と彼を皆に紹介したバーコード課長に新入社員は注意され、「ん。はい。よろしくお願いします、こほん」咳き込み気味に言い直した。

やばいねえ。美形で危うい雰囲気は、やばいねえ。

私はちょっと話がしたかったので、きっかけとして彼にお茶汲みをさせてみることにした。彼が再び現れたのは十数分も後のことで、しかも服の腹部から股関節まで何故か濡れていた。

「こぼしたの？」私がなるべく優しく訊くと「すみません」と彼は申し訳なさそうに言った。別に謝る必要は無いのだけれど「いいわよ」とりあえず会話を続けてみることにした。「時間かけた方が、丁度良く冷めて、良いわ」そこまで言って微笑んだ。すると彼も、頬に靨を作って微笑んだ。女優に見間違えるほどの品のある、笑顔である。

私は彼が盆からお茶を置くのを見守っていたら、そのたった一つの湯のみを彼は盆からツルリと滑らせて、私は湯のみからこぼれた温かな緑色の液体を顔面で受け止めた。ううん。やはり、丁度良い熱さであった。

彼は少し涙目である。ああ、いいのよ。私は大丈夫。気にしないで。そんな風に泣きそうになる方がよっぽどやめてほしいわ。そんな感じで彼をなだめると涙をこらえて笑っていた。私のなかで、友達に車の玩具を取られても我慢する幼児に、彼のイメージが重なった。堪らないわ、この子。

「仕事サボるなよ」と課長に怒られ、新入社員は自分の席に戻った。その頭のバーコード、読み込んでやろうかと息を荒立てる私がいた。
空気を読んだのか、サラは課長のバーコードを引きちぎった。すると千切れたバーコードからぼとぼとと血が零れた。「神は、命を……」課長の最後の言葉であった。「最後ちゃうわ。生きとるわ」課長のツッコミである。サラは手のひらでバーコードを読み取ると、アトラーサラサラモンに進化して、黒民みひろを口説き落とした。
「さ、サラサラモン……」黒民みひろの目が潤んでいた。私は課長の散らかりまくった頭を見て惹かれた。「だ、だめんず」

※

夜。私の部屋で、私が新入社員のことをミクに話していると、ミクは笑いながら酒を飲み、そして「そんなので恋しちゃうのは、お前くらいのもんだよ」と人差し指を向けられた。私は「指を差すな」と指を叩いて、二人で笑った。笑いネタついでに「そういやミク、一昨日の朝かわいい寝言を言ってたわよ」あ？　と疑問顔で「なんて言ってたの」と訊いてくるので、愛しの元カノの名前をひたすら叫んでいたと説明した。すると、ミクは顔を林檎色にして照れ隠しになにか怒っていた。そんなだから新しい彼女できないのよと言うと「作らないだけだし。と言いますか、お前のそのあだ名も原因だよ。俺にはちゃんと未来原壮平という立派な名前が」私は台所に空の発泡酒缶を持っていった。
「聞けよー」
隣の部屋から、空耳かと疑う程の小さなかすれた声が聞こえた。
「カサカサ。キケヨー。カサカサ」台所のテーブルの上で仰向けになっているサムがカサカサと言っていた。
戻ると静かに飲んでいたミクと、私の後ろから仰向けのまま、四肢だけを逆にくねらせて逆四つん這い状態を楽しむ、カサカサとうるさいサムと三人ではしゃいだ。「カサカサカサカサカサカサカサ

カサカサカサ」落ち着けサム。
「せめて好きな人作りなよ」と言うと「それは居るよ」笑うミクが答えた。誰かと聞くと、それは「内緒」と言われた。ずるいと思ったが「お前が振られる頃には、ものにするよ。相当ダメなやつだから、時間掛かるだろうし」と言われたので、彼がその子を物にする日は永久に来ないようにしてやると意地悪くミクに言うと、また二人で笑った。酒を飲む。
酒を飲む。明日も苦しく起き上がることだろう。
「げふっ」げっぷするな、とミクに缶を投げて音が響く。かーん。おでこに的中したあと空中で一回転してテーブルの上の宝くじに的中し、かーん、と音がした。
「当たりそうだな、これ」ミクはそう言って、子供のように目を輝かせた。私は一瞬、どきっとした。当たりそうね、と言いそうになった。
あぐらかきの私の太ももで、リエ五歳児が私の名前をぶつぶつあだ名で「リョウたそ〜、リョウたそ〜」と呟きながら、お腹にすりすりと頭をこすりつけていたからだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7865g/

まあ、サムったら。

2010年10月21日22時30分発行